

少女マンガにみる女ことば

相澤 真波 (学籍番号 11970001)

キーワード：終助詞，女ことば，男女差，ジェンダー

1. はじめに

日本語にはことばの男女差がある。女ことば、男ことばと言われるもので、日本語の特色の一つと言える。日本語の男女差には、大きく分けて二つのタイプがある。一つは、「医者」という職業を指すとき、女性であるならば「女医」と表現したり、「大学生」の場合も女性だと「女子大生」となるような表現差の場合がある。この場合、「男医」や「男子大生」となることはまずない。「女社長」「女子アナ」「女性官僚」など“女性”ということ強調して示す場合がほとんどで、女性がその立場や職業に就くことを特別視する捉え方が性差別であるとして、しばしば社会問題とされる。

本稿で言う「女ことば」「男ことば」とはもう一つのタイプで、例えば女性が話し手である場合は「いいわよ」「そうよ」を使い、男性が話し手である場合は「いいぞ」「そうだぞ」を使うというように、同じことを言うときに、男性と女性で異なることばを使うことを指す。男女による言葉の使い分けというのは、日本語の特色の一つとされる通り、世界でもあまり例がなく、アメリカインディアンの言語、それからカリブ海の東にある小アンティル諸島の言語、そしてグリーンランドのある種族の言語にのみ顕著な例として報告されているに過ぎないという。しかしながら、世界の言葉を見渡してみても、例えば声の上げ下げの調子であるとか、単語の使い分けとかという点で、男女差の全くない言葉というものもないそうである。つまり日本語は、他の言語と比較して、男女差が歴然としているという特徴がある。

しかし、近年、その日本語でも言葉遣いに男女差がなくなっていると一般的に言われている。具体的に言うと、女性（特に中高生）が「ふざけんなよ」「てめえいいかげんにしろよ」などと少々乱暴で、（従来で言う）男っぽいことば遣いをするケースが多くなっている。また、女性が女ことば（女性語）を使わず、男ことば（男性語）を使うようになってきているということもよく言われる。

そこで本稿では、話しことばに女性らしい感じ・男性らしい感じを出すのに大きな役割を果たしている終助詞を取り上げ、女性的とされている終助詞の使用数に着目し、その使用数に変化はあるのか、また変化があるとしたらどのような変化かを考察することにした。

1-2. 調査方法

データとして、ほぼ話し言葉のみで構成されている読み物である“マンガ”を取り扱う。参考にする

るマンガは少女マンガで、70年代からは『ガラスの仮面』¹、80年代からは『ときめきトゥナイト』²、90年代からは『花より男子』³の3つである。この3つは、主人公の年代が中高生であり、女性である。また、それぞれの年代で非常に人気があったものであり、それぞれの年代の話しことばの特徴が反映されている。

このマンガの、登場人物のセリフ、つまり吹き出しのことばの中で使われている女性特有、または女性的とされる終助詞「わ、だわ、よ、ね、のね、わね、かしら、もの、の」の9種類の使われ方・使用頻度を、資料ごとに調査する。

1-3. マンガのことばと日常会話

まず初めに、マンガの中の台詞は、私たちが日常話す会話と同じなのかという問題が挙げられる。これについては、樺島忠夫が『日本語のスタイルブック』で、日常会話とマンガ週刊誌との語彙調査を行っており、マンガの吹き出しの言葉は、日常生活における談話語と品詞比率においてほぼ同じである、という結果を出している。（表1）つまり、マンガの言葉は、日常会話の姿を反映しているといつてよいのである。

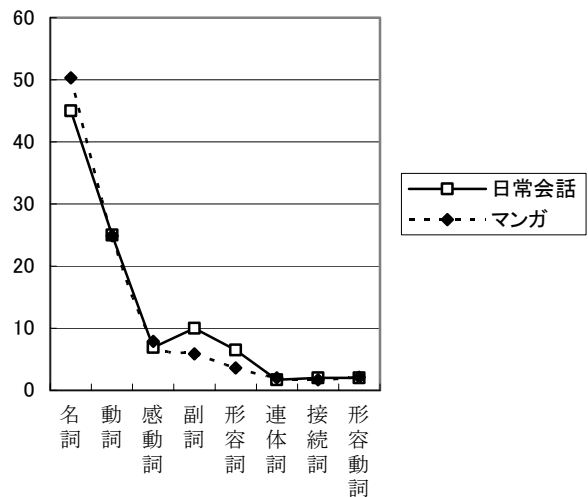
「日常会話においても、マンガ週刊誌においても、コミュニケーションは、対人的直接性のある場面において行われる。送り手・受け手が顔を合わせて言葉をやりとりする。……言葉行動成立時の条件の類似が、マンガと日常会話の語彙的な性格を似たものにしている。」

と、樺島は集計結果からこのように分析している。

マンガのことばが、日常会話を全て反映しているとはいい切れないが、樺島の集計結果を見ても、日常会話とマンガのことばがある程度重なるということは確かである。また、マンガはほぼ登場人物の話し言葉のみで構成されている。以上のことから、マンガの中のことばは、各年代の話しことばを考察する上で、確かな参考資料と成り得ると考える。

マンガの言葉の品詞別比率（表1）

	マンガ	日常会話
名詞	50.3	45
動詞	24.9	25
感動詞	7.9	6.9
副詞	5.9	10
形容詞	3.6	6.5
連体詞	2	1.7
接続詞	1.7	2
形容動詞	2.1	2



樺島忠夫『日本語のスタイルブック
—少年・少女マンガ週刊誌の言葉—』より

2. 会話例からの考察

次に示すのは、『ガラスの仮面』（'70）での、沢渡美奈（高校2年・女）と水無月さやか（中学3年・女）との会話例（例1）と、『花より男子』（'90）の中の牧野つくし（高校2年・女）と松岡優紀（高校2年・女）の会話例（例2）である。

例1）『ガラスの仮面』

さやか「こわいわね」

美奈「え？」

さやか「こわいわねっていったの…」

あの子気がついたのよ 言葉ってものに…

おそらくは本能でかぎとったのよ！」

美奈「ばかなこといわないで！

あの子に演技的な才能があると思うの？

先生がなぜあの子を奨学生にしたかみんな不思議がってるくらいよ！

釘をふむ動作表現のときも笑いの動作表現のときもあの子みんなのいい笑い者になっていだわ！」

さやか「わたしもその話はきいたわ…だからこそこわいっていったの

あの子言葉に対して本能的なカンを持ってるわ」

例2）『花より男子』

つくし「そうだよ 話し合えばいいんだよ 話し合えば…」 (1)

優紀「えーっ 信じらんないっ

道明寺さんと？ なんで!？」

つくし「なりゆきで…2ヶ月ね」

優紀「2ヶ月間のお試して通販じゃないんだから…

好きなの？道明寺さんのこと」

つくし「わかんない 優紀はどういう事するの？彼と」

優紀「えーフツーだよ」 (2)

つくし「なんかやっぱりあたし…」

優紀「なに言ってんのよっ やってみなきゃわかんないって

弱気になっちゃダメだよ」 (3)

2つの会話例とも女性同士の会話場面である。『ガラスの仮面』の美奈もさやかもごく普通の女の子であり、わざと女らしく喋ろうとしているわけでもない。しかし2人の会話は、下線で示したように、ほとんどの文末に女性的な終助詞が使われている。それに対して、『花より男子』では、女性的

な終助詞、いわゆる女ことばがあまり使われていない。さらに、(1) (2)に見られるように、一般的に男性的とされる「(体言+)だ+よ」が使われている。(1) (2) (3)の表現を女ことばで表すとなると、次のようになる。

(1') 「そうよ 話し合えばいいのよ 話し合えば・・・」

(2') 「えーフツーよ」

(3') 「弱気になっちゃダメよっ」

これらの文章が、仮に『ガラスの仮面』の中でのセリフならば、なんの違和感もおぼえないだろう。しかし、現代の(若者の)話し言葉の現状から考えると、どうもわざとらしさを感じられる。このことから見ても、女性の話し言葉から女ことばの必要性が薄くなっていることが伺える。

次に男性と女性の会話例を挙げてみる。以下の文は『ときめきトゥナイト』の中の真壁俊(中学三年)と江藤蘭世(中学三年)との会話例(例1)と、『花より男子』の中で、主人公の牧野つくし(高校2年・女)とその幼なじみの青池和也(高校2年・男)の会話例(例2)である。

例1) 『ときめきトゥナイト』

俊 「江藤…行ったんじゃないかったのか

あいて ちくしょう…思いきり殴りやがって」

蘭世 「大丈夫?…あんまりだわ!

どうして真壁くんがこんなめにあわなくちゃいけないの

ムチャクチャよ…」

俊 「よくあることさ」

蘭世 「そんなの ない!」

俊 「おまえが泣いたってしょうがねえだろ

痛くて泣きたいのはこっちだぜ あいててっ」

蘭世 「真壁くん 真壁くん!泣いてもいいのよ」

俊 「え」

蘭世 「女の前でかっこ悪いとか 自分に似合わないとか

そんなこと気にしないでいいのよ」

俊 「なに言ってんだよ おまえ …泣きたいなんて冗談だよ」

例2) 『花より男子』

和也 「つくしちゃん どーしたのの?

ミケンにシワがよっちゃってるよ」

つくし 「そう?」

和也 「そうって…なんかあったのの?」

つくし 「あたし もう自分のバカさかげんに あきれてんの

昔から人の言うこと信じちゃって
あとから騙されたこと気づくの多くてさ」

和也 「なに言ってんの そこがつくしちゃんのいいとこじゃないか
だからみんなに好かれるんだよ」

つくし 「ほんと？」

和也 「ほんとだよ ぼくはそういうところが好きだなあ」

つくし 「そうかな」

和也 「そうだよ」

『ときめきトゥナイト』の俊が「しょうがねえだろ」「泣きたいのはこっちだぜ」などの男ことばを使っているのに対して、『花より男子』の和也は「どーしたの?」「なんかあったの?」「なに言ってんの」など文末に女性的な終助詞を使っている。『花より男子』の和也是ごく普通の男の子であり、特に女っぽいというわけではない。

しかし、つくしと和也の名前の部分を見ずに会話を読んでもと、「あたし」「ぼく」という自称詞が無ければ、つくしと和也のどちらのセリフかを判断するのは難しい。それだけ話しことばにおいて、男女差が縮まってきているのである。

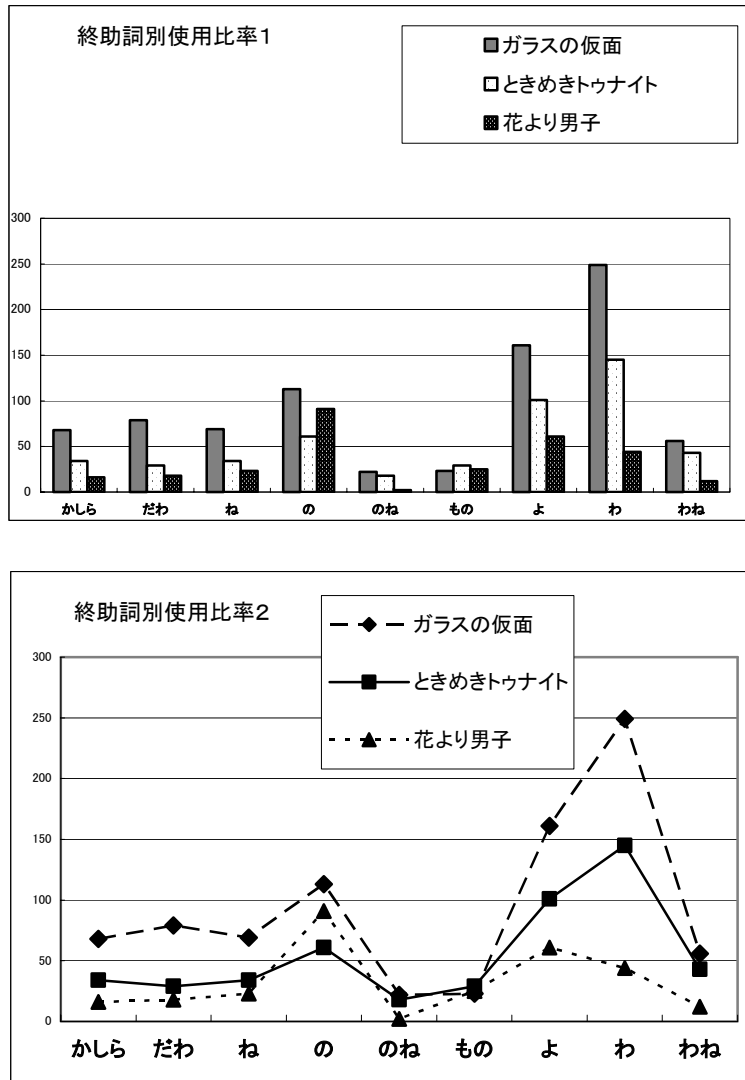
3. 終助詞の使用比率

2章では会話例から終助詞の使われ方を年代別に比較してみたが、次に終助詞の使用数を具体的に挙げ、その推移を見ていく。

マンガ別終助詞比率

	ガラスの仮面	ときめき トゥナイト	花より男子
わ	249	145	
だわ	79	29	18
よ	161	101	61
ね	69	34	23
のね	22	18	2
わね		43	12
かしら	68	34	16
もの	23	29	25
の	113	61	91
合計	840	494	292

終助詞別比率グラフ



3-1-1. 「わ・わね」

「わ」は、話の内容について、軽く主張しながらも表現を和らげ、まるみをつける響きを持つ場合が多く、女性専用とされてきた。また、多くの辞書や文法書でも女性が使う代表的表現のように扱われている。

今回数えた9種の終助詞の中で最も急激に使用回数が減っているのが「わ」である。70年代のマンガ、『ガラスの仮面』では、使用回数が249回と最も高かったが、80年代『ときめきトゥナイト』での使用回数が『ガラスの仮面』の約5分の3（145回）に減り、さらに90年代に入り『花より男子』では、『ガラスの仮面』の約5分の1（44回）になってしまっている。「わね」も「わ」と同様、使用頻度が年代を経るにつれ極端に少なくなっている。

小川（1997）による若者会話の談話分析では、親しい若者同士の会話3分間×127のデータの内、女性の発話の中で「わ」「わね」「わよ」の使用が5例しかなかったという調査結果がある。以上のことから、現代の若い女性は「わ」を使うことがかなり少ないということが言える。

3-1-2. 「だわ」

「～だ+終助詞」の形の中の一つ、「だ+わ」である。他にも「だよ」「だね」「だぞ」「だぜ」「だな」「だよね」「だよな」が挙げられるが、「だわ」はこの中で最も女性的な文末形式といえる。

『ガラスの仮面』で79回、『ときめきトゥナイト』29回、『花より男子』18回と、「わ」と同様に使用頻度は年代を追うごとに少なくなっている。特に、70年代から80年代に入り、一気に使用数が減っている。

具体例として、『ガラスの仮面』では「じゃあ 駅から歩いてきたんだわ」「一角獣の人たちだわ」「やっぱりただのまねなんだわ」のような、自分の考えや判断を表す発話が、『花より男子』になると「あたしったら あのまま 寝ちゃったんだ」「金をやりやあ喜んで受け取るって思って来たんだ」「そうだ 今日お給料日だ」のように断定の助動詞「だ」で終わっているのである。

3-1-1でも述べたように、終助詞「わ」は、表現を和らげ、まるみをつける働きがある。70年代に書かれた『ガラスの仮面』では、女性の発話において断定の助動詞「だ」の後に「わ」を付け加えることによって主張を弱めていたわけであるが、90年代に入ると女性であっても「だわ」をあまり用いなくなっている。「だわ」の減少はそのまま「だ」の増加につながっていると言って良いだろう。「だ」で終わらせることによって、自分の考えや判断に対しむやみに和らげずに、主張する表現を女性が用いているのである。

3-1-3. 男性の「わ」

男性のセリフの中にも「わ」の使用が見られた。『花より男子』の中に

- ・ 「あーやっぱやめとくわ」
- ・ 「俺 家出るわ」
- ・ 「アホか トリ肌立つわ」

の3例があったが、これは女ことばとは捉えがたい。マンガなのでイントネーションが確認できないが、おそらくは「わ」を下げ気味に発音すると思われる。男性の下降調の「わ」については、二つ考えられる。一つは関西方言のニュアンスを含むという見方⁴と、もう一つは井出（1997）の

「下降調の男性の「わ」は、「ぞ」「よ」などが相手に行為を促すことができるのに対し、「わ」は自分自身の確認で、相手に働きかける力は非常に弱い。「行くぞ」とか「行くよ」という発話は、相手に早く準備をしろという含みを持つことがある。一方、「わ」は、話し手自身が情感をこめて過去のことを叙述する時とか、自分自身が強く思っていることを詠嘆・感動の気持ちでこめて認める時などによく使われる。」

という見解である。いずれにしても女ことばではないということが言える。⁵

また「だわ」の使用は『花より男子』の中に

- ・ 「わりい俺こいつに用あんだわ」
- ・ 「同じナンパ師として許せないんだわ」

の2例があった。また、『花より男子』の中で、女性の発話の中にも女ことばとして不自然と思われる例があった。

つくし「電話は？」

優紀「あは… 出ないんだわ これが」

いずれも、この場合の「だわ」は上昇調のイントネーションだと会話として不自然になってしまう。これも「わ」の例同様、女ことばとは考え難い。

3-2. 「よ」

「よ」は強調の意味を表す終助詞で、言い張ったり、言い聞かせる気持ちで念を押すときに使用する。データとして「ナ形容詞基本形+よ」「体言+よ」の女性的表現とされるもののみカウントした。

終助詞使用比率グラフを見てみると、「わ」ほど極端ではないが、かなり使用頻度が少なくなっていることが分かる。しかしながら、グラフを見ると使用回数は『ガラスの仮面』161回、『ときめきトゥナイト』101回、『花より男子』61回と使用率の低下は大きい。『花より男子』の中で「よ」の使用回数は2番目に多く、女性が使う表現としてまだまだ根強いと言える。

「よ」の前に「だ」のある形「～だよ」は、従来、男性的とされてきた。しかし、注目したいのは、70年代には女性のセリフに「だわ」以外はほとんど見られなかった「～だ+終助詞」が80年代に入り目立つようになったことである。さらに90年代に入り『花より男子』では「本当だよ」「明日、学校休みだよ」「電話だよ」など、「だ+よ」の文は男女共に一般的によく使われており、言葉遣い（表現）としても男女差はないと言える。

また、「終止形+よ」は男ことばというのが従来の説明であるが、『花より男子』では「待ってるよ」「何か書いてあるよ」「痛いよ」「～と思うよ」「～らしいよ」などでは、用法に男女差はなく、90年代からは「男ことば」には相当しないようである。

3-3. 「ね・のね」

「ね」は「ごめんね」「じゃあね」「またね」「たぶんね」などの挨拶や相づちに近いものは男女共によく使う。また、「問題外だね」「嫌いだね」のような「名詞・形容詞・動詞+だ+ね」は、最近男女共によく使われるようになっていく。『花より男子』では「～だね」の使用頻度の男女差はあまり見られない。一方、『ガラスの仮面』の中では女性の「～だね」の使用はかなり少ない。

女ことばとしての「ね」は、「名詞+ね」が一般的であり、データとしてもこの形と「そうね」に絞ってカウントした。「ね」の使用回数は『ガラスの仮面』69回、『ときめきトゥナイト』34回、『花より男子』23回と年代を追うごとに約半数ずつに減ってきている。

ちなみに、男性の使用については、『花より男子』の中で

- ・ 「あーあれね」
- ・ 「よかったね」

- ・ 「いろいろ教えてやるからねっ」
- ・ 「うちは新聞もとってないんですからねっ」

などがあった。

また、終助詞「のね」は女性専用の終助詞である。しかし「のね」は『ガラスの仮面』22回、『ときめきトゥナイト』18回、『花より男子』2回と、3作品を通して、最も使用回数が少なかった終助詞である。特に『花より男子』では

- ・ 「疲れているのね」
- ・ 「本当にそれでよろしいんですね？」

の2例しかなく、女性専用でありながら、女性もほとんど使わない終助詞になってきているのである。

3-4. 「かしら」

「かしら」は、「か知らぬ」が「かしらん」「かしら」と転じたもので、女性が会話で用いる終助詞である。「何を買おうかしら」「あの人、大丈夫かしら」のように疑問の意を表したり、「早く来ないかしら」「席を譲ってくれないかしら」など、希望・婉曲な依頼を表す。

「かしら」の用例は、『ガラスの仮面』68回、『ときめきトゥナイト』34回、『花より男子』16回と年代を追うごとに使用数が約半数になっていることが分かる。しかしながら、

(ガラスの仮面)

- ・ 「あたし才能ないのかしら…？」
- ・ 「ど、どうしよう うまくやれるかしら？」
- ・ 「どこかの芸能プロかしら？」

(ときめきトゥナイト)

- ・ 「あなたにあやまらなきやいけない理由何かあったかしら？」
- ・ 「いったいなんの夢をみてるのかしら」

(花より男子)

- ・ 「静さんとうまくいってないのかしら」
- ・ 「ひえ～あの人学校どうしてんのかしら」

などに見られるように、使われ方や意味合い自体に目立った違いは見られなかった。このことを考えると、昔ながらの女性的終助詞と言えそうで、かえってあまりにも女性的であるために、使用されなくなりつつあるとも言えるだろう。

3-5. 「もの」

「もの」は理由を示す終助詞で、不平・不満などの意を込めて、論じ返し、訴える気持ちを含む。主に女性が使用する用語で、「だって、気分が悪かったんですものを」(双葉亭四迷『浮雲』)のような「ものを」の「を」が脱落してできたものである。「もん」と転じて使われることもある。調査結果は『ガラスの仮面』23回、『ときめきトゥナイト』29回、『花より男子』25回とほぼ横這いで、使用頻度にあまり変化はない。

(ガラスの仮面)

- ・ 「だ、だってなんかしなきゃ悪いと思ったんだもの…！」
- ・ 「だってこれでやっとお芝居の稽古ができるんだもの」

(ときめきトゥナイト)

- ・ 「だってわたし真壁くんとお友だちになりたいんだもん」
- ・ 「わたしにはパパがいるもん」

(花より男子)

- ・ 「あたしが男だったらあんたみたいな女の子がいーもんっ」
- ・ 「あいつ彼女できたんだもん」

例を見ても使われ方に違いは見られない。理由を表す終助詞のため「だって～だもん（だもの）」のように「だって」の後にくることが多い。

男性のセリフからは

- ・ 「こりゃ人間の飲むもんじゃねーと思ったもん」
- ・ 「あーゆー女はタイプじゃねーもん」
- ・ 「前見たらさびしそうな女が凍えて立ってんだもん」

の三例がいずれも『花より男子』の中でのみ見られた。

3-6. 「の」

疑問形以外の「の」は基本的には女性的用語であり、断定の気持ちを軽く表現したり、語調を和らげる終助詞である。「の」の用法は大きく分けて疑問形とそうでないものの二つに分けられる。広辞苑(1995)では、「疑問形は普通男性同士の会話では用いない。」とされているが、『花より男子』では

- ・ 「明日どっか行くの？」
- ・ 「お前らこれからどうすんの？」

など、疑問形に関しては男性同士でも頻繁に使われていた。男性登場人物「の」の疑問形の発話回数は『花より男子』だけで24回もあり、もはや男女共通のものとなっていると言える。

女ことばのデータとしてカウントしたのは「の」を文末につけた疑問形以外のものである。『ガラスの仮面』113回、『ときめきトゥナイト』61回、『花より男子』91回と、80年代に半分近く使用が減っているにも関わらず、90年代に入り盛り返してきている。使い方で特徴的なのは、

- ・ 「待ってたの」
- ・ 「気が変わったの」
- ・ 「送ってもらったの」

など、「過去形+の」の形が多く見られた。

一方、この「過去形+の」の形は男性の登場人物のセリフには一例も見られなかった。しかし、3作品の中で唯一『花より男子』の中で以下の3例がいずれも「品詞の終止形+の」の形で見られた。

- ・ 「そう それを知って茶の道があるの」

- ・「なに言ってるの そこがつくしちゃんのいいところじゃないか」
- ・「すげーかわいー照れてんの」

90年代に女性の「の」の使用が増えた原因は、男性の「の・疑問形」の使用の定着と、上記の疑問形ではない「の」の使用が影響しているのではないかと考えられる。男性も「の」を使用することにより、終助詞「の」自体の性質が中性化してきているのだと考える。

4. 先行研究

「女ことば」に関しては、研究者や文学者によって様々な見方があるようである。

女ことばに関する著書をいろいろ読んでみると、大まかに分けて二つのグループに分けることができる。一つは、「女ことばは日本語の特徴であり、味わいの一つであって、この先も無くならないであろう、または無くしてはいけない」という見解である。このような意見を持つのは主に男性に多い。金田一春彦は、女言葉について次のように述べている。

「どうぞ女の方は自信を持っていただきたいと思います。……やはり女のことばというのは私は守りたいと思います。」（『これからの日本語』）

また、興津憲作も、

「男と女は肉体的にも情緒的にもずいぶん違うのだから、言葉が違っていても不思議ではない。むしろ違う方が当たり前ではないのか。男は男らしく、女は女らしい社会が私は好きである。」（『外国語から見た日本語』）

このように、女ことばを肯定的に見る派には女性は女性のことばを用いるべきという考えの傾向がある。

もう一つは、「女ことばとは差別の象徴であり、“女らしさ”や“日本女性のすばらしさ”という枠に女性を縛り付けておくためのもの」というような見方である。中村桃子は、女ことばについて、

「よく『女ことばは日本文化の伝統だ』などと褒められますが、実はこの概念が女の口を封じる機能を果たしているのです。」（『日本語のみかた』「言語とジェンダー研究」）

と、前の二人の意見と真っ向から対立している。こちらは主に女性に多く見られる意見で、このような意見の論者は、さらに、女ことばの行方について、男女平等の言語法に変えていく必要があるとか、男性がことばにおいて女性化（丁寧化）してくるであろうなど、様々な見方をしている。

さらには、古代の、日本語に性差がなかったころへ戻ろうとしている、と見る人もいるようである。佐々木（1999）は

「平安時代から徐々に性差のきざしが見え始め、室町時代に女房詞が成立し、それを手本に江戸時代の公家・武家・富裕町人の娘の女ことばができあがった。明治は国家的教育の中で女性のことばの枠をはめ、性差が確立した。それが1945年の敗戦と女性解放をきっかけに、ことばの制約がとり除かれてきた。そして20世紀末の今、再び古代の無性化の時代へ回帰しようとしているのである。」

と述べている。

「無くしてはいけない」とか「変えていく必要がある」ということは、ことばを人間が意識的に方向付けたり、変換したりするということなのだろうか。ことばを無理やり変えるということには少々抵抗がある。無理やり変えたところでそれが定着するとは思えないからである。ことばが今までどのような進化を遂げてきたかを考えれば、強引なコテ入れなど必要ないのではないかと思うのである。しかし、女ことばが日本語における特徴だから無くしてはいけないというのは、あまりにも短絡的ではないかと思う。女性的終助詞のほとんどが、主張や断定を和らげる機能を持っているということは、女性は自分の意見を強く主張・断定してはいけないという社会通念が根底にあるからである。その社会通念が現在のものではないにしろ、女性が女性的終助詞を用いている限り、その根底に流れる価値観などが現代も無意識のうちに反映されてしまっているのではないかと考えるのである。

5. ことばと社会

日本語におけることばの男女差、つまり男ことば・女ことばは、いつから存在するようになったのかというと、城生（1991）は以下のように述べている。

「『万葉集』の時代に、今ほど男ことば・女ことばの区別があったかということ、全くないというわけではないが、ほとんど問題にならない。『源氏物語』の会話部分を分析してみても、やはりことばの男女差は今ほど顕著ではない。それでは日本語におけることばの男女差が、いつ頃から生じてきたかといえば、だいたい中世の鎌倉時代以降のことなのである。ことに江戸時代になってから、男女の地位の差が社会構造的にかなりやかましく区別されるようになるとともに並行的にことばの男女差が現れるようになった。」

つまり、日本語の長い歴史から見ればごく最近のことと言えるのである。

ことばは常に変化するものである。しかしながら、そのスピードが段々と速くなってきているのではないだろうか。19世紀以前に100年かけて成し遂げたものを、20世紀では10年でやってのけてしまう時代である、というのを耳にしたことがある。時代のスピードが速くなるのに比例して、ことばの移り変わりも速くなってきているのだと思う。

現在の日本社会を考えると、昔とは比べものにならないくらい男女の平等化・社会の民主化が進んでいると言って良いだろう。女ことばに関して言うならば、昔はいわゆる“女らしさ”が求められていた。女性は物腰が柔らかく、品が良いのを良しとし、自分の意見を主張することは良しとはされなかった。だから、最後に「わ」とか「よ」などを付けて主張を和らげる必要があったのであると思う。つまり、社会が「女ことば」を必要としていたのである。そういう観点から見ると、女性は女ことばによって抑圧されていたと言う中村（1995）の主張は頷けるものがある。

女ことばの枠をもう少し広めて言うならば、終助詞だけでなく、敬語もまた形態が変化してきていることも確かである。女性の方が男性よりも丁寧なことばを用いるという考え方が一般的な見方であるが、そういう言葉遣いの差も最近では縮まっているように思われる。職業や身分の差などというものを表す言葉づかいも、非常に薄れてきていると言われるように、男女のことばの使い分けというもの、そういったものとほぼ並行的に、だんだんと薄れていく傾向にあるのではないかと思う。

では、なぜことばが変化していくのか。

ことばとは、その時代つまり社会を反映しているものである。ことばの変化は流動的である。社会が日々変化しているように、ことばもまた社会に合うよう変化し続けているのである。現代では、男女雇用均等制度を初め、社会的に男性と女性の区別がなくなりつつある。従って、女性に求められるものが変化してくる。また、女性自身が求めるものも変わってくる。

近年、日本だけでなく世界的に見ても、男女の違いがなくなってきており、それに呼応するように社会においても、政治には女性官僚、会社には女性重役が活躍している。また服装など生活・行動様式の面でも、女の人も喫煙し、男の人も化粧をするなど、男女差は一段と小さくなってきている。ことばの上にもその流れが表れているのではないかと思うのである。社会のボーダレス化がことばのボーダレス化にも影響を与えていると言えるのではないだろうか。

しかしその一方で、封建社会と男尊女卑が日本よりもはるかに長い歴史を持ちながら、ほとんど男女の違いがない言語がある。中国語である。中国と言えば、三千年もの封建社会の歴史を持つ国である。これまでに述べてきた観点からすると、男ことば・女ことばがあっていいはずだが、中国語には基本的に男女差はない。しかし、語彙の中で女性が好んで使うものもあるようである。しかし、あくまでも「好んで」であって、基本は男女共通のようである。日本語が不安定な言語なのか、それとも中国語が完成された言語なのかは今のところ分りかねる。

6. おわりに

ことばは生きているものである、とよく言われる。しかし、それはあくまでもたとえであって、結局のところ、ことばとは人間が用いる道具である。人間同士のコミュニケーションツールの一つなのであるから、改良を加えなければいつかは不便なものになってしまう。しかし改良といっても機械を改造するのではないから無理やり改良するのではない。ことばは人間によって増殖しながらも、廃れるものは廃れ、生活に浸透したことばのいくつかは定着する。つまり、人間がことばを選ぶのである。流行と淘汰を繰り返しながら、ことばは時代と共に進化していくのである。

では、女ことばが使われなくなっているのも流行の一つなのかと言うと、そうではないと思う。マンガの言葉を調査し、分析した結果、女性の話しことばから女ことばは失われつつある。しかし、今回は詳しく調査出来なかったが「そうだぜ」とか「行こうぜ」などの「ぜ」などの男ことばもまた、男性の会話にあまり見ることができなくなっている。そういったことばは「そうだよ」「行こうか」または「行こうよ」になっており、男女どちらでも使える言い回しがほとんどである。

また、女性的用語とされる「の」も、現在では男性も疑問形に「の」を使っている。『広辞苑』等でも「普通、男性同士の会話では用いない」とされていながらも、「の」の疑問形は、「いいんじゃないの?」「何やってんの?」などのように、男女共通の使用が一般的である。

さらに、「体言+だ+よ」の形は男ことばであり、「体言+よ」が女ことばであるとされているが、実際は、女性でも「バイトだよ」「本当だよ」などと言うのは、現在ではごく普通のことである。

ことばの男女差は確実に縮みつつあると言える。しかし、それは女ことばだけが無くなり使われな

くなるということではなく、男ことばが無くなるというわけでもなく、女ことば・男ことばの両方が歩み寄りつつある、ということではないだろうか。それになんといっても、日本語に終助詞は必要不可欠なものである。男女差が無くなったとしても、終助詞によって話し手・聞き手の心理を表せることには変わらない。終助詞は日本語に表情を与える大事なものであると思う。これからも、常に“今”のことばに関心を持ちつつ、ことばへの考察を深めていきたい。

〈参考文献〉

- 国立国語研究所 1951年『現代の助詞・助動詞—用法と実例』 秀英出版
 NHK 1980年『日本人と話しことば』日本放送出版
 樺島忠夫 1981年『日本語はそう変わるか—語彙と文字—』岩波書店
 水谷修 1987年『話しことばと日本人—日本語の生態』創拓社
 井上輝子 1989年『女性雑誌を解説する』 垣内出版
 小原哲郎 1991年『日本語の魅力』 玉川大学出版部
 金田一春彦 1991年『日本語の性質』 日本放送出版
 れいのるず＝秋葉かつえ 1993年『おんなと日本語』有信堂
 佐々木峻・藤原与一 1998年『日本語文末詞の歴史的研究』 三弥井書店
 相徳昌利 1998年『男が決めた女の常識』 明窓出版
 樺島忠夫 1990年『日本語のスタイルブック』大修館
 城生伯太郎 1991年『日本語ちょっといい話 話しことばの言語学』 創拓社
 中村桃子 1995年『ことばとフェミニズム』 劉草書房
 井出祥子 1997年12月『女性語の世界』 「終助詞」明治書院
 中村桃子 1997年『日本語のみかた』 (AERA MOOK) 「言語とジェンダー研究」 朝日新聞社
 佐々木瑞枝 1999年『女の日本語男の日本語』 筑摩書房
 井上輝子 2000年「女の言葉／男の言葉 言語行動の女性学」 <http://www.wako.ac.jp/souken>
 小矢野哲夫 2000年「言語社会におけるジェンダーの流動化」
<http://www02.u-page.so-net.ne.jp/gb3/tkoyano/index.html/jendr.html>

〈用例出典〉

- 美内すずえ 1998年『ガラスの仮面』 (白泉社文庫) 第1、2、3巻 白泉社
 池野恋 1999年『ときめきトゥナイト』 (集英社文庫) 第1、3、5、6巻 集英社
 神尾葉子 1997年『花より男子』 第16、17、18、19、20、21巻 集英社

〈注〉

- ¹ 『ガラスの仮面』は1976年から白泉社のマンガ雑誌「花とゆめ」で連載し現在もお連載中の人気マンガである。本稿では1976年から1979年の間に「花とゆめ」に掲載されたものを、1998年にコミック版文庫として刊行されたものを資料とした。
- ² 『ときめきトゥナイト』は1982年から集英社のマンガ雑誌「りぼん」で連載していた人気マンガである。本稿では、1982年から1986年の間に「りぼん」に掲載されたものを、2000年にコミック版文庫として刊行されたものを資料とした。
- ³ 『花より男子』は2001年6月現在も、マンガ雑誌「マーガレット」に連載中の人気マンガである。本稿では1996年から1998年にコミック本として刊行されたものを資料とした。
- ⁴ 関西方言のあいさつで、「いってきます」を「ほないってくるわ」「ほないくわ」「そしたらいくわ」「ちょっとでてくわ」という言い方がある。これらはいずれも「わ」を下げて言う。（女ことばの「わ」は上がる）
- ⁵ 本稿では、男性の下降調の「わ」についてはどちらの見解を支持するかという判断は避けるものとする。

